幻想郷淫行記録集

幻想郷淫行マップ

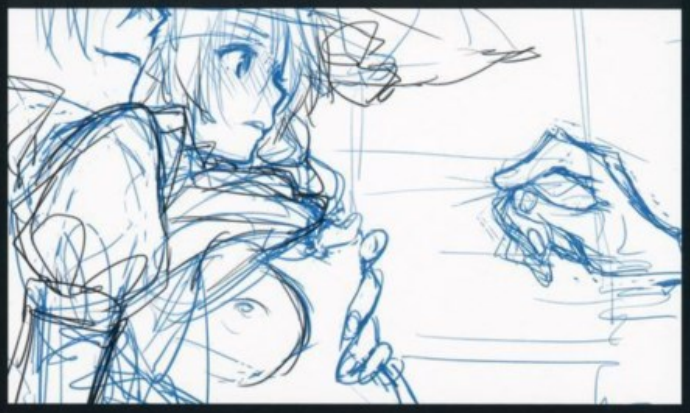
パチュリーの研究

パチュリー・ノーレッジ

紅魔館の南西にある塔がパチュリーの研究塔だ。
夕食の仕度が調ったので少し足早にパチュリーを呼びに向かう咲夜。
パチュリーは研究塔三階の一室にこもることが多い。その部屋の前までくると一つ息を整え静かにノックする。コンコンと薄暗い廊下にノックの音が響く。
「……どうぞ」
部屋の中から入室許可の一言が聞こえてきた。
「失礼します」
そう言って入室した咲夜の目の前に全裸の男に股がり、気持ち良さそうに腰を振るパチュリーの姿があった。
一瞬精液と愛液と汗の匂いが鼻を付いたが一言。
「パチュリー様お食事の用意が調いました」
聞くや否や男は全身を身震いさせ、同時にパチュリーもびくっと腰を浮かせる。ゆっくりを膣から愛液と精液でぬるぬるになったペニスを引き抜き
「ありがとう……今行くわ」
まだ堅くそそり立っているペニスに付着した精液を舌で舐めとりながらパチュリーは返答する。
「そうだ……この精液拭き取ってくれないかしら」
分かりやすいように足を広げて見せたおまんこからは今さっき出したばかりのプリプリの精液が膣内を逆流し尻の穴まで垂れている。
「かしこまりました」
いつもポケットに忍ばせているハンカチを手にとりパチュリーの股間にそっと手を延ばす。
粘度の強い精液を丁寧に拭き取っていく。
「んっ……」
思わずハンカチがクリトリスに当たったようで、くぐもった鼻息がパチュリーから漏れた。
「失礼しました」
とあくまで冷静な咲夜に、
「あなたもこのペニス試してみる?」
と微笑を浮かべて聞いてみた。
「そうですね…時間があるときにでも」
「時間なんて止めればいくらでも作れるでしょ?」
ふふっと笑い合う二人の声が室内に響いた。

イケナイシゴト

霧雨 魔理沙



「今日は友達もいるんだ」
そう言って部屋に着いたばかりの魔理沙に男は話しかけた。
「え？　お前と私だけじゃなのか？」
怪訝そうな顔で魔理沙は男の顔を見つめた。
「大丈夫だよ料金はいつもの倍払うからさ」
あっさりと言い放つ男に魔理沙はさらに怪訝そうな顔を寄越した。
（そういう問題じゃねぇよ）
心の中で一人愚痴る。
すると別の男がなんの遠慮もなく部屋に入ってきた。
「この子が例の女の子か……可愛い子じゃないか」
部屋に入って来た男はまじまじと魔理沙を見てくる。
「なっ、なんだよ」
少し照れながら魔理沙はにらみつける。
「よし三人揃った事だし始めるか！」
「ただし今日は先にイッたやつは罰ゲームな」
それを聞いた魔理沙は驚いた。なぜなら魔理沙のおまんこには朝から男の指示でローターが入っていて今にもイキそうだったからだ。
ニヤニヤしながら男達は魔理沙の体に手を延ばして来た。
「ちょっ今だめだって……！　今触られると……あんっ」
「何がダメなんだよ？」
「乳首服の上からでも勃起してるのわかるぞ」
と言いながら魔理沙の大きくない乳房を露にする。
「今ここにローター当てたらどうなっちゃうかな？」
「馬鹿！　やめろ……！」
ローターが乳首に押し当てられた瞬間乳首から脳内、手足の末端にいたるまで電流が駆け巡った。
「っつ！」
声に鳴らない声を上げ膣に入っていたローターを押し出し、尿道口から尿を噴射させてその場に崩れ落ちる魔理沙だった。
「おいおいもうイッちゃったのか？」
「罰ゲーム決定だな」
快感の余韻に全身が痙攣しているところにそんな男達の会話が聞こえてきた。

お使いの褒美

鈴仙・優曇華院・イナバ

最近の働きが評価されたのか、お師匠様から人間の男をお使いの手伝いにとあてがわれたのは良いけどもっぱら私の性処理要員として働いてもらっているのは秘密。

こんな使い方がお師匠様にバレたらこの男は没収されてしまうに違いない。だから男としている時はいつもドキドキしっぱなし。

……それが興奮したりもするけどね♡

今も午後のお使いを終えて永遠亭の離れで男のおちんちんを口で愛撫しながら自分のおまんこに淫具を突き立てているの。

あ……おちんちんの先っぽからガマン汁出て来た♡

ふふっ……気持ち良さそうな顔してる♡

私もおまんこからいっぱい愛液出て来て淫具の滑りがいいの♡

気持ちいい♡

お口の中でおちんちんさらに熱く堅くなってきたし射精しそうなのね。

いいよ

早くその尿道を押し広げながら熱くてネバネバした白濁液を私の喉の奥にぶちまけて♡

唇と舌でいっぱいしごいてあげる

さっきから私も淫具でGスポットを刺激してでもうイちゃいそう♡

んっ！？

いきなりおちんちんが喉の奥までっ！？

ああっ！

熱いの出てるっ♡♡

すごいいっぱい出てくる、止まらないよぉ♡

ぶりぶりで喉に引っかかって飲み込めない

口から溢れて鼻から出そう……苦しい……。

あっ……やっと射精終わったのね。

まだ尿道に残ってるからストローみたいに吸い出してあげないと気泡がつぶつぶしてお口の中がイカ臭い。

んっ……やっと全部飲み込めたわ

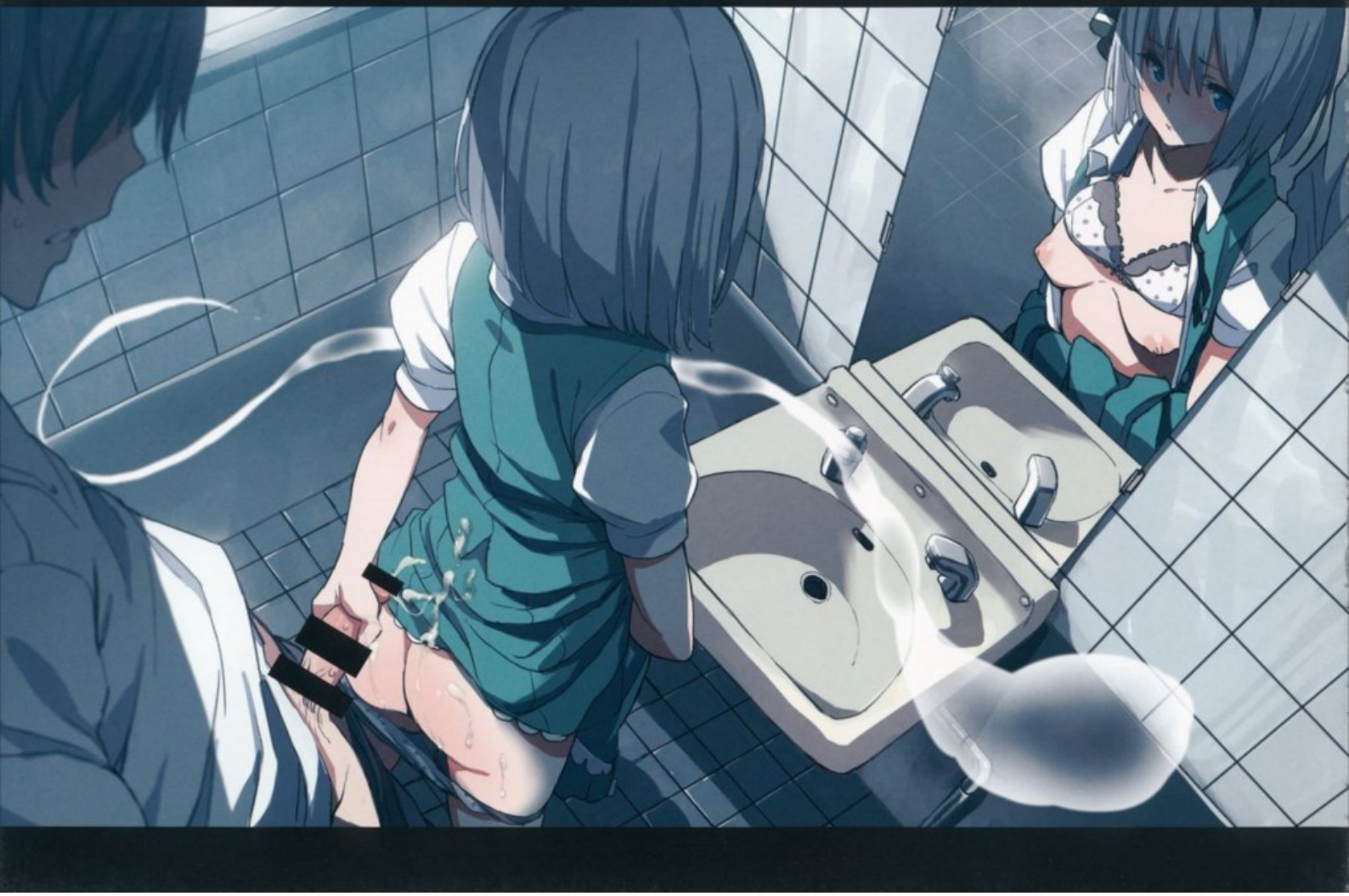
あれ？

あんなに出したのにまだまだ堅いのね

これなら夕飯までにあと一回くらいは精液飲めそう♡

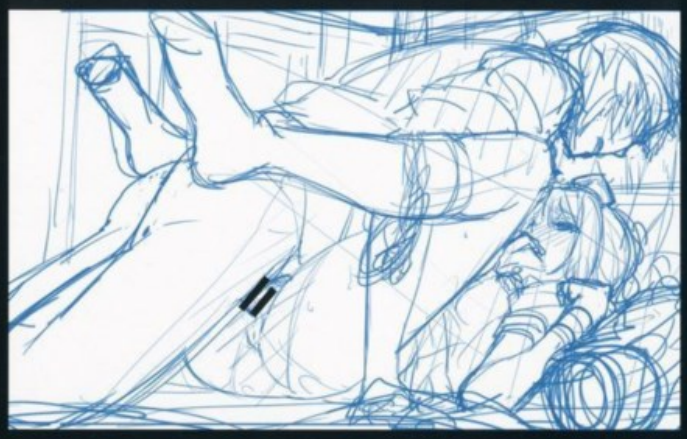
妖夢と魂魄 妖夢

最近は毎朝の稽古が終わると少し遠くの公衆便所に行って、そこで男を待つ。
汗臭くないかなとか今日の下着は気に入ってもらえるかなとか、色々なことを考えて待つ。
しばらくすると男が公衆便所に入ってくる。互いにハニカミながら見つめ合うと、それが自然の挨拶のようにキスを交わす。フレンチキッスを少し楽しんでからどちらからともなく、唇を舌で舐め合い互いの舌を絡めていく。
「んっ……ふっ……」
唾液と唾液が混ざり合う音が耳に届くと、それだけでカーっと顔が火照ってくるのがわかる。
(ちゅぱちゅっ……んちゅくちゅ……)
しばらく互いの唇をむさぼり合っていると、男の手が妖夢のスカートの中にするすると潜り込んできた。
「!?」
少し目を見開いてびっくりした妖夢だったが、すぐにその行動を受け入れた。男の手がパンツの上からクリトリスを刺激してくる。
「あっ……あっ……」
思わず声が漏れる。
「妖夢のパンツもうびしょびしょだよ」
さらにかーっと赤くなる。
「ちっ違います！　これは……汗！　稽古して汗をかいたからです！」
「ふーん、中まで汗かくんだね妖夢は……」
そう言って男の指がパンツの横から膣に入ってきた。くちゅくちゅといやらしい音をさせながら、膣内をあちこち擦ってくる。
「あんっはぁ……ああっ」
気持ち良すぎてぼーっとなっているところに、
「洗面台に手をついてお尻向けて」
と男の声が響く。
言われた通りにすなおに従うとパンツを下ろされいきなりペニスが挿入された。
すでに愛液の量が十分に溜まっている妖夢の膣は何の抵抗もなくペニスを子宮口まで導いた。
「はぁああんっ♡」
びっくりしたのと同時にものすごい快感が全身に走った。
足に力が入らず立っているのがやっとだったが、男は問答無用で腰をうごかしてくる。快感でへたり込みそうになるのを必死でガマンしていると急にペニスが抜かれ、男が妖夢の手をペニスに導いた。
「今日は妖夢の手で出したい」
恥ずかしかったがお尻を男に向けたまま、後ろ手で愛液まみれのペニスをしごく。
しばらくすると男がぶるっと身震いして熱い液体が、妖夢のお尻にぱたぱたとかかった。男の恍惚とした表情が鏡越しに見える。その表情を妖夢はとても愛おしいく感じていた。
「また明日いっぱい出してください♡」



特ダネはカラダで稼ぐもの!?

射命丸 文

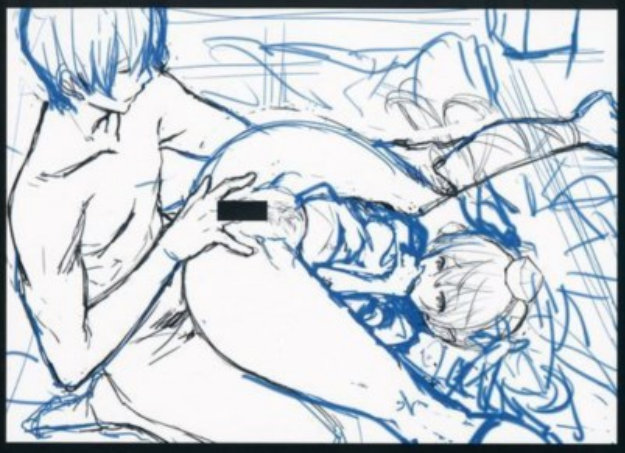


気が付くといつもこの家に来ている気がすると、文はペニスを口で愛撫しながらふとそんなことを考えていた。
「うっ……出る……っ」
言うか早いか男は文の口に大量の精液をぶちまけた。口の中に精液独特の苦みとイカのような臭いが充満する。ぶりぶりとした粘度の強い精液を舌と上あごで潰しながら少しずつ嚥下していく。
「んっ……んっ……ぷはぁ……今日もいっぱい出ましたね」
精液を全て飲み干してから文は本題に入る。
「じゃあいつものようにとびきりの情報くださいな」
「今日の情報はとびきり中のとびきりなんだ……本番させてくれたら、情報を渡してやってもいいぜ?」
「え!? それじゃあ約束が違うじゃないですか!?」
ごねる文の耳元で男は囁いた。
「今回の情報は幻想郷がひっくりかえっちまうほどの代物だぜ?」
「そ……それは本当ですか?」
ゴクリと息を飲む文に男はさらに畳み掛ける。

「はたてちゃんの新聞に勝ちたいんだろ?」
「べ……別にあんな駄新聞眼中に無いですけどね……! でもその情報は本当に信頼できるのですか?」
「当たり前だろ俺が文ちゃんにウソ教えたことなんてあったかい?」
「……無いですけど」
だろ? というと男は文のカラダを押し倒してスカートをめくりパンツに手をかける。
「えっいきなりですか!?」
「そうだけど何か問題でもあった?」
「問題は無いけど……恥ずかしいです……」
そんな文のパンツはすでにぐっしょり濡れていた。きっとフェラしてて濡れてしまったのだろう。
恥ずかしそうに顔を背けている文にはかまわずパンツを脱がす。おまんこは糸が引くほどべとべとになっていた。
「これだけ濡れてれば大丈夫だろ」
男はペニスを文のおまんこに当てて膣口を探し出すかのように上下に擦った。
「んっ……ああっ」
くぐもった声が文から漏れる。ペニスが膣口を探し当て亀頭で膣肉を押し広げて行く。
(にゅぷぷ……)
「ああっはあぁ……」
膣をペニスで満たすと男はゆっくりと腰を動かし始めた。
「あっ……あっ……はんっ」
膣内を擦られるたびに快感で声が出てしまう文は、声を殺すように手で口を塞いだ。
「んっふっ……んんっ……」
男の動きが次第に早くなり、文の快感も加速度的に膨れ上がっていく。
「もっ……出るっ……」
言い終わらないうちにペニスから先ほどより多くの精液が文の子宮口に注ぎ込まれた。
「ああんっ!」
同時に絶頂が文のカラダを瞬時に支配した。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
男は上下に大きく肩をゆらし呼吸をしている。
「はぁ……はぁ……約束通りとびきりのネタ教えてくださいよ」
カラダが繋がったまま文は聞く。
「ああ……それはな……」

はたてちゃんがんばる

姫海棠 はたて



「じゃあ文にはウソの情報を掴ませたのね」
「ウソの情報とは人聞きが悪いな、はたてちゃんは」
文が帰ったあとの男の家には姫海棠はたてが来ていた。
「それで私があんたを文よりも気持ちよくできたら本当の情報をくれると言う訳ね」
「そうだよ……でもその前にはたてちゃんのおまんこ見たいからパンツを脱いで足を広げてみせて」
「おっ……おやすい御用よ」
少し恥ずかしそうにしながらはたては自らスカートの中に手を入れパンツを下ろした。
「こ……これでいいの？」
恥ずかしさのあまり耳まで赤くしながらはたては足を広げて見せた。
「もっと良く見たいな」
そう言って男は、はたてをマングリ返しの状態にし、両手で色素の薄いおまんこのビラビラを左右にそっと開いた。
「あっ……やぁ……」
にちゃ……という恥ずかしい音とともにすでに愛液でてらてら光っている。
クリトリスや尿道口、膣口が露になる。男は指で膣口から止めどなく溢れてくる透明な愛液をすくい、指とおまんこの間できらきらと光る一筋の糸をはたてに見せつけた。
「やあ……そんなの見せないで……」
恥ずかしさのあまり顔を背けるはたてを横目に、男は中指と薬指の二本を膣に突き立てた。
「んあっ！？」
いきなり襲って来た快感にすっとんきょうな声が出てしまう。
（ぬぼ……くちゅぬちゅ……にちにち……じゅぼじゅぶ……）
指が膣内で上下左右に動き快感の波がはたてに打ち付ける。
「あっ……あんっはぁ……ああっ」
快感に耐えきれず声が自然と漏れてしまう。
「はぁあん……だめぇ……気持ちよすぎ……」
指が急に肉壁をものすごい勢いで擦り始めた途端、絶頂の気配が迫って来た。
「ああっ……くるっ！　くるっ！　いっちゃうよぉ……！」
刹那、今までに無い快感の高波が全身を打ち付けた。
呼吸が荒くなりペニスが挿入されたが最早はたてに考える余地は無く、次々に襲ってくる快感に身を任せるしか他なかった。
そのあと男は3回もはたての中に精液を流し込みセックスは終了した。
男の家から帰っている途中はたては立ち止まり何か忘れていることに気付くが、それが何なのか思い出せなかった。
まっ、いっかと一人納得して足早にその場を後にした。

午後の蟬

博麗 霊夢

午後になると蟬の声は一層五月蠅く聞こえてきた。
今日もこの神社に参拝しにくる者はいないだろうなと、霊夢はひとり木の葉に揺れる太陽を見ながら思っていた。
しかし熱い……。何もしなくてもじっとりと汗ばんでくる。スカートをめくり下着の中に手を入れてみた。汗で股間がべっとり濡れていて気持ち悪かった。
おまんこの割れ目を指でひと撫でしてみると、明らかに汗以外の液体が付着するのを感じた。
「うわっ濡れてる……」
そういえば最近ご無沙汰だったし、それに生理も近いのよね……。
そう考えながらクリトリスを無意識のうちにこねていた。
「んっ……はぁっ……んっ……」
思わずいやらしい吐息がもれる。
くちゅくちゅくちゅ……と、クリトリスをこねるだけで膣に溜まった愛液が音を鳴らす。
その愛液を指ですくいクリトリスに塗ってはまたこねる。
「あっ……あっあん……はっ……はっ」
いやらしい声と愛液の音が霊夢以外誰もいない室内を満たして行く。
誰も来ないのを良い事に下着を太ももまで下ろし、上着もずり上げ小振りのおっぱいを露にする。
愛液でテラテラ光る指で乳首をつまむと新たな電流が全身を流れた。
「んんっ……ああっ」
左手で乳首を右手でおまんこをいじる。
膣に人差し指を挿入てみる。なんのひっかかりもなくヌルっと第二関節まで飲み込んだ。指の腹で少し奥のざらざらしている部分を擦る。
「あんっあっあっ……んっはあん……っ!」
指の動きに対して膣内が収縮して指を締め付けてきた。今度は中指も入れてみる。膣が押し広げられて行くのを感じながら二本の指で膣全体を擦り上げる。
「はっはっ……んんっ……あっあっあああっ……きもちいっ!」
ひときわ大きな声が出るがガマンすることが出来ない。
指を出し入れする度に粘度の強い白濁した液体が膣から溢れ出てお尻の穴まで濡らしていく。
(ぐちゅぐちゃ……ぬちゅぬちゅ…にゅぷにゅぷ……)
様々な音を出しながらリズミカルに指を動かす。快感の波が高まり腰が浮く。
「ああああっ……んんんっ!!」
ものすごい衝撃が脳内を駆け巡り快感が全身を瞬時に包んだ。
――いつまでそうしていたのか分からなかったが、愛液でべとべとになった指を膣から引き抜くとひとうため息をつく。
「はぁ……セックスしたい……」
今日も誰もこの神社を訪れる気配は無かった。

これも神職のお仕事なのです

東風谷 早苗

守矢神社の風祝（かぜはふり）である早苗の元に今日も噂を聞きつけた男が一人来ていた。
「風祝様のお力で子孫繁栄の儀をしてもらいたいのですが」
「いいですよ。では服を脱いで奥の間に来て下さい」
男はあっさりとした早苗の返答に少し驚いたが、噂通りだなと納得した。
全裸になり奥の間に来ると早苗が正座して神妙な面持ちで手を合わせて何かをつぶやいていた。
「来ましたね。ではそこに横になって下さい」
男は早苗の言う通りに畳の上に仰向けになった。
何が始まるのだろうかと不安な気持ちでいると、早苗がいきなり股間の上に股がってきた。
すでにいきり立っているペニスを掴み自分もスカートをまくり上げてパンツをずらしながら早苗はペニスを自らおまんこに導いて行った。
（ぬぷぷぷ……）
すでに濡れていたのか早苗の膣は何の抵抗もなくペニスを深々と飲み込んだ。

「んんっ……はぁ……はぁ……奥まで入りましたね……。ではこれより儀式を始めます」
と言ってから早苗は腰を前後に動かし始めた。早苗のおまんこがペニスに快感を送ってくる。
「あっ……あんっ……はっ……ああっ」
早苗も気持ち良いのか艶かしい吐息を漏らしながら一心不乱に腰を動かし続けている
膣口とペニスの間から溢れ出る愛液が泡になって互いの股間を濡らしていた。
（ぐちゅぐちゅぐちゅ……ぬちゅぬちゅんちゅ……）
二人の荒い息づかいと股間から漏れる卑猥な音だけが部屋に響いている。
「あん……あん……はあああん……」
段々早苗の声も大きくなっていく。
こんどは両足でふんばりM字開脚のような状態になってお尻を上下に動かし始めた。
ぱちゅぱちゅぱちゅん……ぱちぱちゅぱんぱん……、とリズミカルに男の股間を打ち付けている。
早苗の膣に擦られて男はすでに絶頂間際にいたが、早苗があまりにも気持ち良さそうにしているのを見て全力でガマンしていた。
（ぱんぱんぱんぱん……！）
腰の動きがさらに早くなり膣もペニスをきゅっと締め付けてきた
「うっ……で、出ます……！！」
「いいですよ……♡　遠慮しないで私の中に出してください♡」
（ぶりゅっぶりゅりゅっどぴゅどくどくん……）
「はああああん……♡♡」
勢いよく飛び出した精液は早苗の膣と子宮内を瞬時に満たし、逆流してきた精液が膣とペニスの間から溢れてきた。
儀式を終えて男が肩で息をしているとドロドロになったペニスを早苗が優しく拭き取ってくれた。
「これで儀式は終了です。きっと子孫繁栄間違いなしです！」
早苗は目を輝かせて言い放った。

お茶会はフェラの後で

アリス・マーガトロイド

アリスはテーブルの上に二人分のカップやスプーンを並べていた。そろそろあの人が来る頃だと思ったら顔が熱くなり手も汗ばんでくる。

（ああ早く会いたいな……）

そんなことを考えていると玄関のドアをノックする音が響き、驚いて紅茶のポットを落としそうになる。

「いらっしゃい。早かったのね♡」

と男を出迎えたアリスの頬は紅潮していた。

男を客間に通すとテーブルを囲んで座り互いに少し照れながら見つめ合った。しばらく見つめ合っていたが男が立ち上がりアリスの目の前まで歩み寄ると、アリスの手を自分の股間に導いた。

驚くアリスだったが男の意図を悟りズボンを脱がせてすでに充血して勃起したペニスを取り出しそっと指先で亀頭から玉袋にかけスジをさすると、先っぽから透明な液体がぷくっと溢れてきた。

それを舌先ですくい取ると亀頭と舌の間にねばっとした糸がかかった。透明なガマン汁を舌の上で味わってからペニス全体にキスをしていく。

「うっ……」

男が快感にくぐもった声を上げる。もっとその声が聞きたくてアリスは口を大きく開けてペニスを頭から飲み込んだ。

「うわっ」

男はさらに訪れた快感に思わず大きなうめき声を上げた。

可愛いと思いながらアリスはさらに口全体を使ってじゅぽじゅぽと音を立て、頭を前後に動かしペニスに快感を送り込んでいく。

（しゅぷっぽぷっぷぷっじゅくっじゅぽっ……）

ペニスを涎でべとべとにして亀頭やカリ裏スジを丁寧に舐め上げ玉袋の中の二つの精巣をコロコロと舌の上で転がすと男が快感に顔をゆがめるのが見えた。

またペニスを口に含み喉まで飲み込むといっきに亀頭付近まで口を後退させる。

その動き早く繰り返すと亀頭は真っ赤に充血して海綿体で出来た竿がより強度を増して行く。

「でっ、でるっ！」

言うが早いか熱くドロドロに白濁した液体がアリスの口の中を満たしていく。

「んんっ」

ずっと続くかと思われるほど長い射精を口の中で受け止めてから尿道に残った精液を吸い取るとテーブルの上にあるカップにそれを全て吐き出した。

「見てて」

とアリスは言って紅茶を精液の入っているカップに注ぎ込むとスプーンでよくかき混ぜて一気に飲み干した。

カップをテーブルの上に戻し上品に口元を拭いたアリスは驚いている男に微笑みかけた。

「さぁお茶会をはじめましょう」

二人の秘密の時間

レミリア・スカーレット＆フランドール・スカーレット

僕は最近毎晩のように紅魔館の地下にある妹様のお部屋に呼ばれる。今夜も食後に呼ばれて来た。

すでにお部屋にはお嬢様（レミリア様）と妹様（フランドール様）のお二人だけが居て、一糸纏わない姿でベッドに横たわっている。

「やっと来たのね……早く服を脱いでこちらにいらっしゃい」

そうお嬢様に促され僕も全裸になりお二人のいるベッドに近付く。

毎回思うがお二人のカラダは子供のような体形でありながらどこか艶かしく、大人の女性のようなエロチックな雰囲気を纏っていた。

そのカラダを見ているだけでペニスに血が充満して痛いほど勃起してくる。すでに準備万端なのか、お二人はお尻を僕のほうに向け、愛液でテラテラと光るオマンコを広げて見せてくる。

「私のぐしょ濡れマンコにあなたのそのカチカチに勃起したチンポをねじ込んで良いわよ」

「お姉様……私のおまんこにも勃起チンポ欲しい……」

お二人は我先に僕のチンポが欲しいようだった。

「では、今日は先に妹様のおまんこに挿入させて頂きます」

そう断ってからゆっくりとペニスを膣内に滑り込ませていく。さすがに入り口は少し狭いが中の肉壁は十分濡れているせいもあり、ペニス全体を優しく包み込んできた。

「あああ……っ！」

挿入と同時に妹様から快楽の声が漏れる。

「フランドール様……根元まで入りました……」

今にも射精してしまいそうな快感に耐えながら妹様に報告した。

「う、動いて……」

許可が降りたのでゆっくりとペニスを出し入れする。

（にちにちっ……ぬちゅぬちゅ……ぐちゅくちゅ……）

「ああん……はあん……あん……あん……♡」

「少し早くしますよ」

言い終わらないうちに腰を強く妹様のお尻に打ち付けていた。

（パンパンパン……パチュパチンパン……）

「あんあんあん♡ ああん♡ うんっ♡」

「もう……でます……！」

僕は妹様のおまんこに目いっぱい精液を注ぎ込んだ。

ずるっとペニスを引き抜くと膣からは逆流した精液がシーツの上にボタボタと垂れて来た。

「まだまだ出し足りないみたいね」

そう言ってお嬢様は妹様の愛液と僕の精液でドロドロになったペニスを自ら自身のおまんこにあてがった。特にコレと言った抵抗もなくぬるっとペニスが奥まで挿入される。

「んんっ……」

と身震いさせてお嬢様が快感にため息を漏らす。

「早く動かしなさい」

そう言われると動かないわけにはいかない。

僕はペニスから伝わる快感をかき消すように、思いっきり腰をお嬢様のお尻に打ち付けた。

（ぱちゅんぱちゅんぱん……ぱちゅぱちゅん……ぱんぱん……）

「あん♡ ああ……♡ はあぁん♡ ……ふん♡」

先ほど出したのにまた射精欲がムクムクと頭を持ち上げてきた。

もうすでにガマンの限界にきた亀頭は赤く晴れ上がり、尿道内には大量の精子が充填されていた。

「でっ、出ます……お嬢様……！」

また多量の精液を今度はお嬢様のおまんこに流し込んだ。

「ああああんっ……♡♡♡」

その後朝までお二人は交代で僕の精液を絞りとって行った。

はじめましての方もそうでない方もこんにちは saitom です。

今回は初めて東方本を作ってみました。ずっと東方の本を出したかったので嬉しいです。
キャラの設定等も色々調べて描いてみましたが気に入らなかったらごめんなさい。

ちなみに僕は霊夢と魔理沙が好きです。
もちろん他のキャラもみんな魅力的で好きですよ。

いつか幻想郷淫行記録集２みたいなのも作れたらいいなと思っています。
漫画描きたいですね。
エロエロなやつ。

ではまたどこかでお会いしましょう。

saitom

STAFF

企画・制作 ―― 壁の彩度
発行 ―― 壁の彩度 (http://chromaofwall.com)
イラスト・文章 ―― saitom
デザイン ―― youkiss

原作 ―― 上海アリス幻樂団

印刷 ―― STARBOOKS (http://www.starbooks.jp)

仕様ツール ―― CELSYS CLIP STUDIO PAINT
Adobe InDesign CS5
Photoshop CS5
Illustrator CS3

CHROMA OF WALL

発行日 ―― 2014 年 08 月 17 日

※無断転載・インターネットへの無断アップロード
オークションへの出品はご遠慮下さい。

CHROMA OF WALL